

## 第七講 重装歩兵戦術の問題（1）

問題の出発点：古代国家を「戦士共同体」と見るモデル

アリストテレス、『政治学』1279b：当初は騎兵が軍事力において卓越していたので国制は貴族制であったが、その後重装歩兵が国家の戦力の中心になると民主政を発展させる（185頁）

マックス・ウェーバー、『古代農業事情』、「序説」：古代国家の理念型的発展のモデル

↘官僚制を伴う都市王政→領域的専制王政↘

原始共同体

世界帝国

↘貴族制ポリス→重装歩兵ポリス→民主制ポリス↗

軍事技術の発展が軍事体制の変革をもたらし、そのことが政治体制の変化を結果する

古代史家：マラトンの戦いとサラミスの海戦はギリシアのペルシアに対する軍事的優位を印象付けるだけでなく、西欧の東洋に対する優位と優秀性を証明するものと映った。

僭主政出現の根拠を解明するものと捉えられた←民衆の指導者（ペイシストラトス）であり軍事の指揮官（キュプセロス）

安藤弘氏の整理：1970年代までの研究を整理、紹介

マックス・ウェーバーとスノドグラス

ウェーバーに基づき古代ギリシアにおける民主制の成立にいたる国家体制転換のメカニズムを、農民を中心とする重装歩兵戦術の発展に求める。

スノドグラスに依拠して、初期の重装歩兵戦術における貴族層のイニシアティブを主張し（騎馬の重装歩兵）、戦術の発展に伴う（徒歩の重装歩兵、更には走る重装歩兵）農民層の台頭と、彼等の革命的大衆化への転換＝安藤氏のオリジナリティー

ロリマー：重装歩兵革命

スノドグラス：重装歩兵改革

モリス：現代の歴史家の蜃気楼

安藤氏の整理による重装歩兵戦術の発展

## 暗黒時代の戦闘 (Fig. 2)

戦士は皮製のかぶとを被り、2本の細身の投げ槍を携え、大きな8の字型の盾(ディピュロン式の盾)に守られ、戦車に搭乗して戦場に赴き、一騎打ちの戦闘を戦う

## 青銅製の兜と胸鎧の登場 (Fig. 3)

戦後アルゴスで出土。現在、ナフプリオンの国立博物館に収蔵・展示。重装歩兵のものか海兵のものかは論争。その他の装具が調っていない。重装歩兵戦術がこの時期現れたということを示すものではなく、後に重装歩兵が使用する装具が個々ばらばらに現れてきていることの証拠=漸進論の立場。

## 騎馬の重装歩兵の登場 (Fig. 4~5)

前8~7世紀の交。小さな丸盾と2本の投げ槍。地上に降りて一騎打ち。密集歩兵陣という戦術は見られず、装具のみ重装歩兵のものが出てくる。コリント式兜の登場 (Fig. 6)

前7世紀初め。個人戦には向かず、集団戦の発生。

## 大型の丸盾と太く長い突き槍 (Fig. 7)

従来とは異なる戦闘の出現。攻撃用の主力兵器が突き槍に変わり、剣は補助的兵器に後退。

## ファランクス出現 (Fig. 8)

前675年頃ファランクス出現。戦列を構成し、笛吹きと弓兵の存在。槍は上手に構える。

## 騎馬の重装歩兵と徒歩の重装歩兵の混合 (Fig. 9)

前6世紀はじめには騎馬の重装歩兵と並んで農民を主体とする徒歩の重装歩兵が出現。

## 徒歩の重装歩兵によるファランクス形成 (Fig. 10)

前6世紀中頃には騎馬の重装歩兵は消え、徒歩の重装歩兵に一本化される。

## 走る重装歩兵の出現 (Fig. 11)

前6世紀後半。革を使用した軽量の複合型鎧の出現。兜もコリント式からカルキディケー式更にはアッティカ式に変化していく。マラトンの戦いの勝利は彼等によって獲得された。

## 重装歩兵戦術の完成 (Fig. 12)

前5世紀。ピルス式兜と卵型の盾。重装歩兵は改良の技術的限界に達する。より軽量で機動性に富んだペルタスタイ（軽盾兵）の出現。前4世紀はじめのレカイオンの戦いでのスパルタの重装歩兵隊に対するイフィクラテスの勝利。戦列の奥行きを増すことによって攻撃の際の打撃力と防御力を強化。

ローマの解決法とは逆。ローマは戦列を空けておいて、個々の兵士が機動的な戦闘できるようにし、両翼に騎兵集団を配備して敵部隊の側面迂回を阻止する。それに対して、ギリシアでは、敵歩兵部隊が散開して破壊活動を行うのを阻止するために騎兵が使用された。騎兵が攻撃部隊としては利用されていない。

#### 単純な戦術

奥行き8列、後には16列、の横列を形成し、主力は右翼に置かれ、ファランクス右翼による敵戦列の突破を試みる。騎兵、弓兵は補助的な役割しか与えられていない。全てはファランクス右翼の重量・攻撃力に依存。中央及び左翼は敵の攻撃力を吸収する機能しか有していない。

複雑な戦術的機動は不得手。密集しすぎて、状況の変化に対する柔軟性を欠く。特に敵陣突破の後の勝利の拡大のための追跡に重大な限界を持つ。

散開状態で敵の騎兵の攻撃を受けた場合、側面や背面の防御を欠いている為に極めて脆弱。

指揮官に要求されるのは巧みな戦術運用ではなく、味方兵士を叱咤激励して戦意を鼓舞することと、自らも兵士の一人として最前列で勇敢の戦闘する事。戦闘中に指揮官から兵士に命令を出すことは不可能であった。

更に指揮官に要求されるのは戦場への兵の移動の指揮と戦場付近の都市から食料などの必需品の入手を確実にするための外交と兵站機能の保持。

兵士に要求されるのは集団としての一体性を維持することと、慣習的に要求されている前に進んで行くことだけである。状況の変化に対しては鈍感である事。

#### ロリマーと「重装歩兵革命」（186～187）

分析手段：壺絵と文学作品

基本構想：前7世紀初期に出現

基準：盾（腕輪付き）・槍（突き槍）・脛当て・兜（コリント式）  
・鎧（金属製）

壺絵：プロト・コリント、プロト・アッティックに一揃いで描かれる

前提：絵付師は神話時代ではなく、彼が生きている現実を描いている

装具と戦術は一体

ホメロス：ジオメトリック期の、重装歩兵以前の戦闘

重装歩兵：革命的大衆＝キュプセロスの支持基盤

アンドリュース（187）

重装歩兵＝デーモス

重装歩兵の代表者：僭主

重装歩兵革命

スノドグラスと「重装歩兵改革」（187～189）

基本構想：重装歩兵は貴族のイニシアティブ

装具と戦術との時間的差：1世紀近くの差

重装歩兵は革命的大衆ではなく、支配者の道具

段階的・平和裏に権利獲得

スノドグラスの結論（188～189）

フォレスト（189）

前8世紀第4四半期から漸進的に発展（189）

その結果として貴族は軍事的優位を失う

古い時代の社会的差別の解消

一体感の形成

新説（189～）

ラタクツ（189～190）

基本構想：ホメロスの戦士たちは戦列を組んで密集歩兵陣を形成（189）

一騎打ちは文学的表現であって現実描写ではない  
一般の歩兵から構成される密集陣が個々の戦闘において決定的  
に重要（189～190）

根拠：格闘戦と集団戦は対立しない

第一局面：密集陣同士の戦い

第二局面：逃走と追跡

第一局面：逃走側の再集結と追跡側の集結

第一局面の二つの段階

第1段階：投擲戦：前衛戦

第2段階：集団戦

格闘戦を戦うのは貴族、集団戦を戦うのは群集という図式を否定。群衆  
は集団戦だけでなく、投擲戦や前衛戦においても戦った。

「叙事詩に描かれている格闘戦は大規模な戦闘から切り取ったものでしか  
なく、この大規模な戦闘を表しているに過ぎない。」（190）

プリチェット、モリス、ハンソンらの新説（191～192）

プリチェット：ラタクツの説に注目

武器が戦術を決定したのではなく、戦術が武器を決定（191）

暗黒時代において既に密集歩兵陣（191）

モリス：現代の歴史家の蜃気楼（191）

暗黒時代のアガトイとカコイの身分的峻別からポリス時代のポリタイ  
への平等化＝重装歩兵戦術

ハンソン：ポリス防衛の意識の共有（191）

農民は自分の農地を守るために共同でポリスの防衛に参加

社会のあり方が戦術を決定し、戦術のあり方が武器を決定する

ラーフラウプ：「イリアス」において集団戦が決定的に重要（191～192）

ポリスの成立が集団戦をもたらした（192）

貴族は密集歩兵陣と同時進行で歴史的に形成されてきた（192）

新説に対する批判（192～194）

サントスオツソ：モリスらは少数派（192）

多数は前8世紀後半ないし7世紀中頃までに導入

多数説も二つに分かれている：一つは漸進論、もう一つは社会史の立場（中産階級の道具としての重装歩兵）

ファン・ウィース：ラタクツ批判（192～194）

新説の言うように前7世紀に集団戦が導入されたのが偽りなら、僭主政の起源や民主制の成立に関するこれまでの説は誤っていたことになる。

「壁のごとく群がっている」（N152）

「盾に対しては盾が、兜に対しては兜が、人に対しては人が押し寄せた。馬の毛で飾り立てられた兜の輝く前立ては彼等が頷いたときに触れ合った、それほど彼等は接近してしっかりと地面に立っていたのだ」（N131・3）

これらは密集歩兵陣を意味しない。

戦闘の中で兵士等は自然に密集していった

「黒雲」という形容が当て嵌まるような無定形な群集

「黒き戦列」は戦闘の間そっくりそのままではない。分散し再集結。

兵士はしばしば戦場を後にした。（193）

単に戦いを前に密集して群がり、戦いの間にばらばらに広がり、時には再び群がる（194）

プロマコイ（前衛戦）様式の戦闘は戦いの間いつでも見られる：槍を投げて戦うために戦列から飛び出して戦う（194）

本隊は戦闘から距離をおいている／プロマコイは敵に一番近い位置にある集団（194）

誰でもがプロマコイになる、脱落することによって大衆になる（194）

新説批判を超えて

戦術が社会に影響を及ぼすのか、社会が戦術に影響を及ぼすのか＝アルカイック期のギリシアは貴族制社会なのか、そうでなかったのかという基本的視点による

新説の問題点：

- 1) アテナイでの逆戻り現象を説明し切れていない
- 2) 僭主出現やアテナイの民主制成立の歴史過程を説明できない
- 3) ホメロスの密集陣と古典期の密集陣は異なる

ファン＝ウィースの問題点：

- 1) 変な戦闘←戦闘場面の流動化
- 2) 集団戦の伝統←「戦士のクラテル」

## 結論

ホメロスにおける文学的装飾：英雄のイメージは明確だが、現実からはかけ離れている

壺絵：ホメロスの影響→同時代を描いてはいない

アガトイの戦闘：分散状態での集団戦（197）

カコイがポリタイに組み込まれた時、戦闘に動員

戦列そのものは重要ではない。重要なのは共同体の一員として戦闘に参加したかどうか

貴族が国防の名誉を独占したというような事態は生じなかった

軍制の変革が民衆を台頭させたのではなく、民衆の台頭が軍制を変革させた  
軍制の変革が民衆を台頭させたのではなく、民衆の台頭が軍制を変革させた